

臨死体験における不可分の全一性と量子コヒーレンス・共存・非局在性

齋藤忠資

④ 分節できるが全体から分離できない量子状態

量子状態ベクトルは、すべての要素が完全に相互に結合し合っていて、全体から切り離すことができない仕方です。一体性をなし、共存している。不可分の全体が完全な状態である。要素を全体の中で分節（識別）することは出来るが、全体から切り離して、バラバラに分解することは出来ない。（Whole in One 全一性）しかし量子状態ベクトルは、要素が全体としての一体性が崩壊してバラバラになる可能性を潜在的に秘めている。量子状態ベクトルでは、すべての粒子は絡み合っていて、時間と空間を超えた非局在性を示している。右回りのスピンと左回りのスピンの粒子のペアは、時空内では右回りのスピンと左回りのスピンの粒子に分割されるが、時空外では全体としての一体性という本来の完全な状態を保持している。時空外では右回りのスピンと左回りのスピンのペアの粒子は、右回りと左回りのスピンの分割される可能性を潜在的に秘めながら共存している。右回りのスピンと左回りのスピンを備えた粒子のペアは、分節出来るが、分割できない仕方です。一つの全体として一体になっている。量子コンピュータでは0と1の区別がなくなり、 $0=1$ になる。

遅延選択実験では、二つのスリットを通過した粒子が、スクリーンに干渉項を残した後、そのスクリーンを取り去って、粒子がどちらのスリットを通過したかを測定器で調べると、干渉項は消えて、粒子がスクリーンに写る。これは量子状態ベクトルが、時間外の非局在性をそなえていることを示している。(1)

また時空内では右回りのスピンと左回りのスピンの分割されるということは、二項対立ということであり、時空外の非局在的全体では、二項対立は止揚されるということである。状態ベクトルと確率の波には、質量がなく（したがって物質ではなく）エネルギーもなく、物質の波ではないが、多くの波は波長が一致すると全体として一つの波に統合される。（波の干渉性はコヒーレンスと共存になる。）あるいはすべての波が共振し合って、一つの統合された全体として一体になる。また個々の波は分離してそれぞれ独立することもできる。2スリット実験で、粒子を一つずつ時間の感覚を置いて発射すると、スクリーンにはランダムに粒子が映し出されるが、多くの粒子を集合すると干渉縞を作る。すべての粒子は全体として分離できない仕方です。一体になっている。（コヒーレンス）コヒーレンス（波の干渉性）

は全体として完全な一体性の状態にある。

A ヤングによれば ①光は完全なユニットとして放射され、そのエネルギーは標的への道
のりで消散することがない作用量子である。②原子レベルおよび場合によっては、分子レ
ベルにおけるすべてのエネルギー交換は、作用量子(光)によっておこる。③作用は物質同様
ここに完全なるユニットとして存在し、分割することは出来ない。プランク定数は作用の
ユニットであり、周波数に正比例したエネルギーを持つ一定の塊ないし束として放射する。
作用は量子ないし全体性の形で起こり、このユニットは一定である。作用は全体性の形で
起こる。全体性というのは、意志行動・決断に固有なものであり、目的は部分ではなく全
体の中にある。全体はバラバラに分割されたら機能できない。科学が扱う質量・空間(距離)・
時間は皆部分であり、部分は全体に由来する。全体が部分に由来するのではなく、部分よ
り全体の方が先行する。全体性であり作用量子である光が第一原因であり、この全体であ
る光から時間・空間・質量が生じる。①作用はそれ以上小さく出来ない量子ないし ユニ
ットとして起こる。②これらのユニットは一定で不変の大きさを持つ。③それらは数えら
れるものであって、測られるものではない。④あるものに限定されないので、それらは因
果連鎖の終わりをなし、第一原因に当たる。(2)

量子状態は、すべての部分を組み合わせることができる全体ではなく、全体はすべての部分の
総和以上のものである。可視光線は振動数の違いによって7色を生成する。7色は分節(識
別)できるが、連続しているので切れ目はない。7色全体としては無色透明な光(空)になる。
可視光は分離できない仕方一つ一つの全体として一体になっている。(全I性)人間の目には見
えない電磁波が宇宙全体に遍在しているが、電磁波スペクトル全体についても同じことが
言える。幹細胞は生体の各機関に分割し個別化される潜在的可能性を備えている。種と受
精卵は生体になる潜在的可能性を備えている。個体発生は系統発生を繰り返す。ホログラ
ムではすべての部分が全体の情報を包含しているので、全体と部分を切り離すことは出来
ない。

ⓑ 量子状態の不可分の全1性(コヒーレンス・共存・非局在性)が粒子化・物質化・時空
化されているので、物質界では無数の粒子が時空内で相互作用し、不可分の全1性は解体
して、要素がバラバラに分解された状態になっている。(デコヒーレンス) 量子のコヒーレ
ンス状態は、測定器(物質)によって測定され、物質の環境世界と相互作用することによって、
時空化・粒子化される。また物質である脳によって知覚され解釈されることによって波
の干渉性は消失する。物質界のマクロ系では、デコヒーレントな環境世界から隔離するこ
とによってしかコヒーレンス状態は保持できない。そこではバラバラに分解された 要素が
分離できない仕方一つ一つの全体として共存し、時間と空間を超えて完全に一体になっ
ている。(非局在性) (3) すべての要素が全体から切り離すことができない仕方一つ一つの全体
として一体になっているというのは、オーケストラの音楽やコーラスに見られるように、

完全調和の世界である。デコヒーレントな物質界のマクロ系政界から隔離することによって、コヒーレンス状態を生成する現象が例外的に見られる。それは①ボース・アインシュタイン凝縮（超伝・超流動・レーザーなど）②生命体 ③自己意識 ④人間の意識によって生み出された現象 ⑤臨死体験である。これらはホルルキーをなして、振動するエネルギー全体場の中の間を形成している。進化が進むにつれてホロンの階層がアップし、量子システムの本質である不可分の全1性とコヒーレンス・共存・非局在性の投射(写し)のグレードがアップして、完全な不可分の全1性というゴールに向かって進んでいく。ここから水平軸(量)から垂直軸(質・クオリア)への新たな転換が始まる。

① 物理の世界における量子現象

完全な不可分の全1性というゴールに向かう量子現象は、生命と意識のない物理の世界の量子現象に見られる。レーザー・超伝導・超流動などでは、多くの粒子が相互に結合して、分離できない仕方一つとして全体として一体になって共存している。絶対零度では電磁気現象が完全に環境世界から隔離されて状態になり、コヒーレンス状態になる。ここでは時間と空間の隔たりは超えられている。また全体が部分を規定していて、部分の総和が全体を形成するのではない。自然界の光はデコヒーレンスだが、レーザーはコヒーレントな光であり、ホログラムを作ることができる。ホログラムでは全体の情報がすべての部分に含まれていて、フラクタル（自己相似形）になっている。すべての部分は分節できるが、全体から切り離してバラバラにすることは出来ない仕方一つとして一体になっている。すべての部分の真のアイデンティティは全体にある。全体が部分を規定していて、部分の総和が全体を形成しているのではない。ホログラムでは、どの部分も全体の情報を含んでいるので、空間の隔たりはない。時間上のホログラムは、どの時間も全体の情報が含まれているので、時間の隔たりもない。4次元時空のホログラム（ホロムーヴメント）には時間と空間の制約がない。従って4次元時空のホログラムには量子のコヒーレンス・共存・非局在性が見られる。

電磁波(光)には、質量はなく、物質ではない。光子はボース粒子であり、一つの場所に行くついでにも共存できる。遅延選択実験から明らかのように、電磁波自体には時間は存在しない。光には過去も未来もなく、全てが現在にある。すべてに事象が同時に今起こる。光自体には空間がないので、他の粒子が占める空間がなく、他の光子というものは存在しない。唯一の光が電磁波スペクトルとして、宇宙全体に遍在している。光には時間と空間のバリアはなく非局在的存在である。光は自分自身と相互作用する。光はすべての光子が分離できない仕方一つとして全体として一体になっている。(完全調和) 光はヒッグス場と重力に捕えられてスピードダウンし振動数を下げることで、多くの部分に分離して、粒子か・物質化し、時間と空間を生み出す。(4) 光には時間と空間がないので、空無という特異点である。光子が光速で運動しているように人間には見えるが、光そのものには運動は存在しない。唯一の宇宙に遍在する電磁波が、測定者のスピードに依存して、無数の光子が光速で運動しているように見えるが、これは物質の測定器と

物質の脳によって作り出された錯覚にすぎない。(5) 電磁波は多くの振動数に分節できるが、全体から切り離すことができない仕方で、全体として一つになっている。(完全調和) 電磁波スペクトルは切れ目のない連続体である。多くの振動数の違いが可視光線の場合、連続した色の変化が人間の目によって生み出されるが(分節・識別可)、切れ目というものではなく連続している。7色すべてを一つにすると、無色透明(空)になり、人間の目には見えない。

② 量子現象としての生命

生命体はデコヒーレントな環境世界から自らを隔離することによって、量子状態を生成し維持している。無生物はデコヒーレンスで、生きているという量子の本質を失っている。生命は生きているという量子の本質の現れである。(6) 幹細胞はすべての器官になる潜在的可能性を備えているが、分裂して各器官に分化していく。他の帰還になる潜在的可能性は消える。すべての器官は互いに結合して、共同作業をして、全体として一体性を保持している。各器官を分節することは出来るが、生体全体から切り離して分割することは出来ない。(7) 生体はすべての部分(器官・細胞など)がバラバラにできない仕方で全体として一つになっているので、目的は部分(器官・細胞)ではなく、生体全体の方にある。生体全体の方が各部分よりも先行する。こうして生命体はホーラルキーを形成している。部分をバラバラにすると生体全体は死んでしまう。器官と細胞から見ると生体全体には量子のコヒーレンス・共存・非局在性が見られる。すべての部分が不可分の仕方で、全体として一体性をなしているという量子状態が崩壊し消失すると、生物は死ぬ。(8) また種や卵子と精子の結合から、生物全体が形成されることには、部分には全体の情報が含まれていることを示している。この事はどの個体発生も系統発生を繰り返していることにも示されている。両者にはフラクタル(自己相似)の原理も働いている。不可分の全1性(コヒーレンス・共存・非局在性)の完全な状態が、物質界を超えた光の不可分の全1性意識にあるので、物質界の生命はその投影・写しである。DANは光の完全な命を投影する受信装置であると思われる。

③ 量子現象としての意識

脳は生命体からさらに自らを隔離させることで、コヒーレント状態をアップさせることによって、意識を創出する。物質の量(水平軸)ではなく、クオリアという質(垂直軸)が、意識と共に顕著な仕方で見られるようになる。これはホーラルキーであり、多次元の振動するエネルギー場の中の間である。脳は肉体の五感からの情報を統合して知覚している。脳の機能は分節(識別)することは出来るが、全体から切り離して分解することは出来ない。脳の情報処理は電磁作用によって行われる。脳の多くの分業した部位の機能を一つに統合している(結合問題)のが、量子の絡み合い・コヒーレンス・共存である。脳はすべての部位の情報を不可分の全体として一つに統合する機能を備えている。

(9) 意識と意識が生み出す自己・思考・感情・知覚・意志・決断・意図・選択・注意・行動・体験などは、全体としてひとつであり、分節（識別）できても、分割することは出来ない。半分の決断・行動・選択・感情などというものは存在しない。意識は結合し関連付けるもので、分割できない。(10) 光は脳の情報の担い手であり、ホログラフィックメモリを可能にする。このすべての情報の全体としての一体性が、脳から消失すると意識は喪失する。意識と意識が関わる自己・思考・決断・感情・行動などは、脳によって周りの世界から隔離された量子現象に他ならない。脳のニューロンの血流は測定できるが、意識と意識が関わる自己・思考などは測定できない。意識と意識が関わる自己などは、量子情報として脳と相互作用しない。思考は脳から分離して記述できる。思考はすべての量子情報と同様時空化、局在化されないので、脳の部位の間を相関関係に導くことができる。(11) 脳は物質の流れではなく、量子情報の流れである。量子プロセスによって、脳の部分が全体へと関連付けられることで、意識がもたらされる。また量子情報によって意識の部分から意識全体について省みることができる。こうして自己を顧みることができる。(12)

物質界を超えた光の不可分の全1意識がコヒーレンス・共存・非局在の完全な状態なので、人間の自己意識はその投影・写しである。脳は光の完全な自己意識を投影する受信装置である。光の不可分の全1意識は、脳を用いて物質界にアクセスするために時空化する。(13)自己意識のエッセンスは脳で電磁場と統合される。(14)

たとえばどこに旅行しようかと考えるプロセスでは、多くの潜在的可能性が分節（識別）できる仕方で、全体として一体性の中で存在している。その中の一つが全体から分離する仕方で、選択されて具体化される。この時他の可能性はすべて消失する。コヒーレンスからデコヒーレンスになる。しかしデコヒーレンス説では、何故多くの可能性の中から一つが選ばれたのかは説明できない。意識がその一つを選択したものと考えられる。行動は意識の身体への作用である。意識と身体は分節（識別）できるが、全体として一体であり、両者を分解することは出来ない。心身とも生命体であり、分離できない仕方で全体として1体になっている。(15)

④ 量子現象としての人間の意識の表現

人間に意識によって生み出される芸術作品はデコヒーレントな環境世界から自らを隔離して、コヒーレントな状態を創出することによって創作される。意識によるクオリア（垂直軸）が顕著な形で現れる。オーケストラの音楽は多くの楽器の音色から構成されているが、全体として不可分の一体性をなしているので、音色を分節（識別）することは出来るが、全体から切り離して分離することは出来ない。絵画も多くの色から構成されているが、全体として不可分の一体性をなしているので、色を分節（識別）することは出来るが全体から切り離して分離することは出来ない。詩はすべての文字が全体として一体性をなしているので、文字や単語を分節（識別）することは出来るが、文字を組

み替えると、詩全体の意味が不明なる。文字は詩全体との関連性の中で初めて意味を持つ。ペルシャの絨毯のような織物は、多くの色を持つ多くの糸が織合わされて、全体として見事な絨毯になっている。それぞれの糸を分節（識別）できるが、全体から切り離してバラバラにすることは出来ない。音楽と絵画と詩と絨毯では、音色と色と文字と糸ただ結合すればできるものではなく、意味を持つように全体を一つに統合しなければならない。真のアイデンティティは全体としての一体性にある。ここでも全体は部分の総和以上のものであることが示される。全体が部分より先行し部分を決定している。

⑤ 物質界（脳と肉体）を超えた臨死体験

物質界でも量子現象であるコヒーレンス・共存・非局在性は例外的に存在するが、いずれもデコヒーレントな物質界から自らを隔離することによって創出した特別な状態である。環境世界はデコヒーレンスなので、大きな制約を受けている。生物と人間同士はバラバラに分裂していて、不和や争うが絶えない。完全な慈しみ・安らぎ（ホーム）・喜び・知覚などは見られず、完全なもののかすかな投映（写し）が見られるにすぎない。完全な安らぎ（ホーム）や慈しみへの渴望はそれがこの物質界には欠如しているからに他ならない。我々は完全な意識の光が欠如している影・闇の世界に生きている。真に存在するのは光のみであり、影・闇は実在するものではなくマーヤーである。光の世界は陽画であり、影・闇の世界は陰画のようなものである。

臨死体験者の自己意識のエッセンスは、デコヒーレントな物質界と肉体・脳から完全に解放されている。臨死体験の世界には意識と生命は見られるが、物質は全く見られない。臨死体験者の自己意識のエッセンスは、不可分の全1性という完全な存在の在り方（状態）であるゴールに到達する。ここで光の不可分の全1世意識・統合的全体意識という完全な意識・自己・知覚・安らぎ（ホーム）・慈しみ・喜び・いのちの意味・美（色・音楽）・情報・調和などを見出す。

「人間とは存在そのものが啓示される開かれた場である。」（M. ハイデッガー）

⑥ 光の完全な全体意識と物質界への投映・写し

不可分の全体性という量子の特徴は、光の世界にも物質界の一部にも見られるので、光の世界と物質界の一部には、投映・写しが見られることになる。すべての要素が完全に相互に結合し合って、分離できない仕方、全体として一体の一体性を完全な仕方、実現しているのは、臨死体験の光の全体意識の世界だけである。光の世界には、物質はなく、意識のみがある。光はあっても物質光（太陽）はなく、意識はあっても身体はなく、生命はあっても生体はなく、ホームはあっても建物の家はなく、音楽はあっても楽器はなく、色はあっても物はない。花や草木や野原や川などがあっても、物質として存在している訳ではなく、ホログラム（思念形態）として存在している。光の全体意識の世界は、完全な本体（本源）である。光の全体意識の世界は、完全な仕方、コヒーレンス・

共存・非局在になっている。これに対して物質界はデコヒーレンスであり、例外的にコヒーレンスが見られるにすぎない。物質界のボース・アインシュタイン凝縮と生命と意識という量子現象は、いずれもデコヒーレントな環境世界から、自らを隔離することによって創出される。つまりデコヒーレントな環境世界の制約のもとにおかれている。進化論的に見ると。まず物質界の中でボース・アインシュタイン凝縮が創出され、次に生命体が創出され、最後に意識が創出された。ここで注目したいのは、意識の前に生命体という量子現象が創出されているということである。言い換えれば、生命体と意識とでは量子現象と言ってもレベルに違いがあるということである。この事はボース・アインシュタイン凝縮にも妥当する。人間には、細胞→期間→生体→脳→意識という分化と統合のプロセスが見られる。(ホロンとホルルキー) 意識と身体は分節・識別はできるが、全体としてはホロンとして統合されているので、分離することは出来ない。人間の自己意識のエッセンス (I am)は、アイデンティティを失うことなく、脳と身体を超えて、完全な量子システムである光の全体意識と一体になる。(ホーム・本源) 光の完全な全体意識の働きで、物質界にコヒーレンスという量子現象が創出されたとするならば、臨死体験者の自己意識のエッセンスが、光の全体意識と一つになった時、ホーム (本源) を見出すのは当然のことと思われる。物質界に見られる例外的な量子現象は、光の全体意識の働きによる投射・写し・アナロジーに過ぎない。真に実在するのは光の全体意識界のみであり、物質界の量子現象は光の意識のホログラム・思念形態に過ぎない。

㉓ 不可分の全1意識：分節可分離は不可

臨死体験では脳と肉体は死とともに消滅するが、私という個は存続する。すべての個は完全に相互に結合して (共存)、分離することができない仕方で一つの全体として一体になっている。(全1性) すべての個は同時に他のすべての個とつながっている。一人だけでは愛は成立しない。他があつて初めて愛は成り立つ。多を一つに結合するのが愛の絆に他ならない。これが光の世界が無条件の愛である根拠である。すべての個は全体のなかで分節 (識別) できるが、全体から切り離してバラバラに解体することは出来ない。(全1性) 個は全体として一体の統合的全体意識となって共存しているので、各子同士の間にはバリアはない。個はオーケストラの音楽の音色のように、全体の中で完全に調和している。(16) 互いに共鳴し合つてコヒーレンスであり共存している。光の世界ではすべてのものが音を発して、一大シンフォニーになっているのは偶然ではない。どの個にも全体の情報が含まれているので、個を全体から分離できないホログラムに似ている。万物は一体である。(Oneness) 典型的な例を見てみよう。

「肉体の死とともに、私は全体から切り離された分離状態から、全体の部分へと結合された。私は光の全体意識の部分として統合されていた。そこには完全調和、コヒーレンス、共存、非局在性が見られた。」(17)

「すべてのものが無限の全体に帰属している。私はすべての命と不可分の仕方で絡み合っていた。我々は統合のアスペクトであり、我々は皆一つである。どの人も集合的全体に影響する。」 (18)

「すべてが不可分の全体になる。時間上も空間上も制約がなくなり遍在して、宇宙の全知識を獲得した。この時の意識状態から見ると、この世の通常の意識は夢に似ている。過去と現在と未来の宇宙全体が一つのセンターに収縮。このセンターにすべてのものがその存在を依存している。この中心には変化はない。すべてのものを照らしているのは、純粹意識の光である。大いなる空は万物を包んでいる。空は一つのものではない。空はすべての中のすべてである。私は全体から分離した存在ではない。純粹意識の光には慈しみと祝福と真のホームと真の自己がある。」 (19)

「各個人は全体と結合し、全体は各個人と結合していた。」 (20)

「多くの色を持つ水滴が川の流れとなる。多くの水滴は過去に生きていたすべての人の経験である。個は全体に帰属している。すべての人の集合的知識が全体である。個が全体を形成している。多が1をなし、1が多をなしている。多と1が同じ時間と空間に同時に存在している。集合的体験は全知であり、集合的意識によってすべての経験を同時に知る所となり、それは川となって流れる。」 (21)

「どの部分にも全体がある。我々は全体の1部分である。全体が1であり、1が全体である。全てが遍在し、無条件の慈愛によって結ばれている。」 (22)

「私は光の中に溶け込んだが、以前として私として存在していた。私たちはそれぞれ別個の存在であっても、皆一つで、光輝く1つのものの1部分であった。私たちは皆あの愛の中に存在し、各人は全体の1部をなし、その全体と1つのものだった。」 (23)

「私たちは皆個人でありながら永遠に愛で結ばれた一つの存在であり、周りの光の1部として存在するものであった。」 (24)

「光の中で私は私の形の境界を依然として感じる事ができた。しかし同時に私は光と一つであると感じた。」 (25)

「万物の中に存在したすべての存在は、より大いなる全体存在の部分であった。私はすべての存在と一つであり、しかも依然として私個人として存在していた。」 (26)

「体の感覚は感じないけれど、私のアイデンティティを失わなかった。光の存在と私は一つであったが、私は今まで通り私であった。」 (27)

「すべてのものと存在は光からできていた。すべてのものは光であった。個々のものと存在はあったが、生きている光がすべてのもののエッセンスであった。」 (28)

「私が帰属しているシティに入ると、私は完全に全体になった。」 (29) ここでは光のシティは不可分の全1性のシンボルである。

「私は至る所に遍在し、かつ同時に光の中にいた。私は一人の個人であり、かつ私は遍在する光の中にいた。」 (30)

「私は独自の存在であると同時に、全体の最小部分であった。」(31)

「私は光の1部であると同時に、依然として私であった。」(32)

「私は光の中にいた。光は私の中にあっただけで、私は依然としてアンディであった。私は至る所に存在し、同時に私はここにいた。私は1個人であると同時に光の中にいた。私は光になった。我々は皆光の中で一つであった。」(33)

「私はこの光と一つになった。もはや個人としては存在しないで、この光の1部になった。私はフェニックスのようになった。エゴは破壊された。それは最も祝福された美しい瞬間であった。それは全存在の頂点の様だった。そこにはエゴはなく、個はこの光の1部であった。」(34)

「覚醒している光球は自らの球体空間の交わりの中身であり媒介物であった。個の光球はユニヴァーサルな基礎の上に共有する覚醒の可能性を、無限の空間性の中に創造し維持した。私は覚醒した光球であり、交わりの光球であった時、完全に覚醒した。」(35)

「光の存在と私は一体であると同時に区別されていた。」(36)

「光は私の1部になり、私は光の1部になった。光は一つの存在であるが、光の中には明確な個があった。」(37)

臨死体験には量子システムの属性が見られる。両者とも物質ではなく、質量も物質界の4つの力(重力・電磁力・二つの核力)もない。コヒーレンス・共存・非局在性が両者に見られる。臨死体験者は、脳と肉体を超えた意識にシフトしても、私と言うアイデンティティは保持し、天井付近から下の状況を見ていて、トンネルの中でも光の世界でも、私と言うアイデンティティは存続している。光の存在(死者・天使・イエスなどの宗教的人物)も個を保持している。その私という個がすべて同時に相互に結合して、分離できない仕方、一つの全体として一体になっている。それぞれの個は全体の中で、分節(識別)は出来るものの、全体から切り離してバラバラに分離することは出来ない。完全な愛は両者をついにし、分離(識別)はできても、切り離してバラバラに分離することは出来ない。物質界では完全な愛は不可能であるが、臨死体験では完全な愛によってすべてのものが完全に相互に結合し合って、分離できない仕方、一つの全体として一体になっている。(全1性)1例を挙げよう。

「その内部に光を持つ無限の光の多面のダイヤモンドのヴィジョン。光の小さな点のすべては、我々の個人の魂で、分離しているが光そのものである。」(38)

臨死体験者は意識を向けるだけで、空間のバリアを超えて地上の生者の意識と一つになり、その人の心を読むことができる。肉眼では見ることができない遠くのものを見たり(遠隔透視)、声や音を聞いたりする。頭を動かすことなく360度見ることができる。自分と他者のバリアがなくなり、他者と一体なので、言葉なしに思いを即時に通じ合わせることができる。言葉による誤解やごまかしや隠し事はないので、互いに完全に理解し合うことができる。また時間のバリアがないので、未来のことも過去のことも体験できる。過去も未来もすべて現在になり、因果関係がなくなる。欲するだけでどこでもい

かなる時間にもアクセスできる。人生再検査は時間と空間のバリアを超えていて、人生全体は分離できない仕方全体として一体になっているので、瞬時にして起こるが、人生のそれぞれのシーンは、はっきりと分節（識別）できる。臨死体験の出来事、すなわち脳と肉体をこえる意識へとシフト→トンネルの通過→死者や光の存在との出会い→人生再検査→地上に戻ると言われる→再びトンネルを通過→肉体に戻るというシーケンスは、時間と空間のバリアがなく、分離できない仕方全体としてひとつになっているので一瞬にして同時に起こる。しかもそれぞれの出来事には分節（識別）がありシーケンスがある。

人間の自己意識のエッセンスは、光の全体意識のメンバーである。個の真のアイデンティティは光の全体意識にある。真の目的（ゴール）は光の全体意識にある。光の全1意識はすべての人間のホーム（本源）がある。1例を挙げよう。

「私はこの地上に来て学ぶために私自身の人生経験をする。私は万物の1部である。私は神の1部という仕方、私を通して知識・光・愛が流れる。私は神の中において、神は私の中にある。我々はひとつである。私はすべての魂と一つである。我々は完全な全体の部分として共に織り込まれている。」(39)

④ 臨死体験におけるその他の不可分の全1性

部分は全1性の中で分節（識別）はできるが、全体から切り離してバラバラに解体できないという状態は、人生再現にもみられる。人生の各シーンは分節（識別）できるが、人生全体は時間と空間の隔たりなしに瞬時にして再現される。臨死体験の出来事も、それぞれの出来事は分節（識別）できるが、出来事全体は瞬時にして起こる。臨死体験ではそのほかでもすべての事象が同時に生じるが、それぞれの事象ははっきりと識別できる。例えば一度に多くの事柄を明確に区別して考え理解することができる。音楽はその細部まで完全に識別できるが、全体として時間なしに瞬時に奏でられる。無数の色も完全に識別できるが、全体として空間の隔たりなしに表現されている。1例を挙げよう。

「音楽の音は、地上で聞いたことのないものであった。完全に覚醒した意識を持って、音楽の部分のすべての細部を信じがたい深さを持って区別でき、どの些細な動きも完全に知覚できた。」(40)

⑤ 完全としての不可分の全1世界

光の世界では無条件の慈愛によって、すべてのものが互いに相互に結合し合っていて、分離できない仕方全体として一体になっているので、完全に調和した世界であり、全体は完全な状態になっている。光の全1意識は全体性と完全性を示している。代表的な例を挙げよう。

「私は全体で、又全面的に完全だった。」(40)

「光の世界は完全であった。」(41)

「光の存在は完全であり、無条件の慈しみと安らぎと喜びで満ちていた。」(42)

「私は突然光に包まれているのに気付いた。それは地上の光とは別の光であり、色も地上のものとは別であった。それは暖かく輝いていて、安らぎを与え、受け入れる光であり、全てを許して、決して裁かず、それまで味わったことのないような完全な安全さを与えた。それは完全であり、無条件の慈愛である。光は地上で求めていたすべてのものであった。それらはすべて光の中にあった。」(43)

「光の存在には無条件の愛が溢れていて、体験者が光と一体になり、完全になると同時にすべてのものになった。」(44)

「光の世界には、全面的な祝福、完全調和、完全な無条件の慈愛、完全な理解のみがあった。すべてのものは完全であり、そこはホームであった。」(45)

「ホームにいた時、私は祝福に満ち、完全な状態であった。」(46)

「光の世界は完全な状態であり、祝福に満ちていた。」(47)

「光の世界の美しい園は細部まで完全であった。」(48)

Ⓕ 欠如とネガティブなものがない完全な状態

光の世界は完全な状態なので、欠けているものはない。完全な光の世界には闇と影はない。(49) 闇と影は光が欠如している状態であり、それ自体存在している訳ではない。(マーヤー) 実在しているのは光のみである。典型的な例を見てみよう。

「光のホームには欠如しているもの、必要とするものはなく、すべては満たされていた。」(50)

「誰も他に害を及ぼす人はいない。欠乏はない。他人のエネルギーを盗む必要もない。利己的な人はいない。必要なものは何でも手に入れることができる。必要なものは何でも手に入れることができる。人々は必要なものをすぐに作り出す能力を持っているので。」(51)

「すべてのものがダイヤモンドのように輝いていた。木と植物と花は汚れがない。死んだ葉や小枝がなく、すべてのものに汚れがない。」(52)

光の完全な状態は、無条件の慈愛や完全な安らぎ(ホーム)や喜びや生きる意味や意識や知覚や美で満たされているが、物質界はこれらが投影されているだけで、ほとんど欠如に近い状態になっている。(デコヒーレンス) この物質界の真の問題は無条件の慈愛と真の安らぎ(ホーム)である光が欠如していることであり、この世界の真の問題はこの世界では解決することができない。(アインシュタイン。C. ユング)

㊦ 存在そのものとしての光の完全な状態

無条件の慈愛による全1意識の完全状態は、存在の在り方としての存在そのものである。これはハイデガーが生涯探究した存在そのものであろう。代表的な例を引用しよう。

「私はすべてのものの部分であった。私はすべてのものの内部に存在していた。私は形を持っていなかった。私は存在の完全な状態であった。私は端的に存在のみであった。」

(53) ここでは光の全1意識と1体になった時、私には形がなく（無相の自己）存在の完全な状態であり、純粹に存在するのみになったと言われている。

「この時間のない完全さの中に、この光と結びついているある確かな存在を感じる。」

(54) ここでは完全さは時間のないことと結びついている。

「神の光の中では、見解や結論や信念がない。ただ存在あるのみ。それは全体的なハーモニーの完全な状態のなかにある存在である。(55) ここでは完全調和状態には存在のみがあるとされている。肉体意識の場合は主体と客体のバリアがあるので、見解・結論・信念といったものがあるが、光の統合的全1意識では、主体と客体のバリアがなくなり、私は対象と一体になるので見解・結論・信念のようなものはない。(56)

「光の存在は存在そのものである。」(57)

㊧ 唯一の完全な実在としての光の全1意識

光は唯一の完全な実在なので、臨死体験者の自己のエッセンスは光の全1意識とひとつになることによって完全な意識になる。典型的な例を挙げよう。

「光は私を抱くように包んだ。私は光の中にあり、光の1部分になった。私は光によってエクスタシーを体験し、栄光を授けられ完全になった。」(58)

「私はこの光の中へ溶け込み全体になろうとした。私が光とひとつになった時、私は自分が完全になるのが分かった。」(59)

「それは純粹な愛のエネルギー粒子の中で浴びているようであった。この光輝いた活力を与える愛が、私を通して流れている間、ほんの数秒間だけだが、私は光と完全にひとつになった。その時私は完全であった！私は光と共に存在したのではない。私は光になった。私は同時にすべてのものになった。」(60) ここでは光と1体になった時、私はすべてのものとひとつになったと言われている点に注意しなければならない。

「私は癒されて完全な全体になった。光の存在になった。」(61) ここでは光の存在になることが完全な全体になることであると言われている。

「私の意識は光によって拡張した。私はこの場の荘厳さ全体へと拡張した。私は光になった。未知のことは何もなく、私は完全になった。」(62)

「光とひとつになった時、私は全き完成感を味わった。」(63)

「光の中で帰属性と意味と完全性を感じた。」(64)

「その光に近づくとつれ、自分の存在の核心まで貫くように思われた。純粋な愛としか呼びようのない強力な波長に圧倒された。今や思考は全くなくなり、その光に完全に浸されていた。この時間のない完全さの中で、この光と結びついているある確かな存在を感じた。それは人間ではなく、ある種の存在で、その姿を見ることは出来ないが、その意識と自分の心が今結びついているように思われた。」(65)

臨死体験者の自己意識のエッセンスは、分離できない仕方で全体として一つになり、統合的全体意識（ソウルファミリー）の一員となる。ソウルファミリーは臨死体験者がそのメンバーである全体であり、完全な状態（存在の在り方）である。統合的全体意識にはコヒーレンス・共存・非局在性が見られる。光の無条件の慈愛によって結ばれたソウルファミリーこそ、我々の本来の在り方（ホーム）に他ならない。

① 無境界としての光の全1意識界

光の世界ではすべての意識が完全に相互に結合して、全1性（whole in one）になっているので、分離やバリアというものは無い。（無境界）すべてのものは共存し、時間と空間の隔たりもなく、コヒーレンス状態である。それは統合的意識や完全な知覚・理解・コミュニケーション・情報となって具体化される。 代表的な例を引用しよう。

「最終的には万物は本源に帰って、再び結合される。物質界との分離と言う幻想は終わる。」(66)

「光と一つになった時、すべての境界が消えた。」(67)

「光の世界には、制限も境界もなく、内部と外部もない。」(68) ここでは内部（主体・自・心）と外部（客体・他・身体）のバリアもなく、両者は一体であると言われている。

すべてのものを結び合わせ、分離できない仕方で一つの全1性に統合しているのは、光の無条件の慈愛の絆である。典型的な例を見てみよう。

「光の無条件の愛とエネルギーには、境界がない。」(69)

「光の愛と憐れみで私はそれまで味わったことのないほど満たされた。この愛の中ですべての境界が消えた。私は憐みの存在達と一体になった。」(70)

「光の世界には分離がない。善と悪もない。絶対の愛と安らぎと1体性と統合のみがある。」(71)

「私は私であったが、光との分離感はなかった。」(72)

N.L.Danisonによれば、宇宙の本源はその思念形態によって、振動数を下げることで、光の存在と肉体と結合した光の存在（魂）を創出するが、光の存在は個であると同時に全体として本源に統合されているという。（共存）(73) 光の世界では、すべての個が分離できない仕方で全体として一体になっているので、個と全体との分離やバリアはない。粒子の右回りのスピンと左回りのスピンは、時空内の現象であり、時空外の量子システムでは全体として一体になって共存している。（不可分の全1性）量子コンピュータでは、0と

1の分割がなく、 $0 = 1$ となって共存している。臨死体験では自己意識のエッセンスは時空を超えているので、時間と空間のバリアがない。空間（距離）がないので、固定した場所（位置）や方角はないので、視点によって自由自在に変わる。ここはあそこであり、右は左であり、上は下であり、前は後ろである。固定したサイズはないので、思いによって大きくも小さくもなる。主体（自）と客体（対象・他）のバリアがないので、私は万物であり、万物は私である。（万物一体）(74) また心と身体という分離もないので、光の存在の思い(意図と注意)は即時に実現するが、物質界では心身にバリアがあるので、自分の思いや意図が即時に実現するということはない。実現しなかったり、時間がかかったりする。光の世界には、男性と女性という性による分裂はない。性別は肉体による分離である。

① 時間と空間を超える非局在意識

脳と肉体を超えた自己意識のエッセンスは、時間と空間の制約を超えて非局在意識になる。(75) 代表的な例を補おう。

「時間と空間から自由で、時間と空間は私の覚醒を妨げなかった。」(76)

「歴史全体、物体の分子と原子、すべての生き物の思考と感情を見て感じ取った。ロンドンやモスクワを尋ねた。どこにでも即座に行くことができた。本当にそこに行った。望めばかなえられる。思えば実現する。私はイエスや弟子たちの心の中に入った。彼らの会話を聞き、食事をし、ワインを飲み、においをかぎ、味わった。私には体がなかった。私は純粋な意識という存在でした。私はローマ帝国、バビロン、ノアやアブラハムの時代を訪ねた。どの時代へも行けた。」(77)

「時間のすべての点は同時に存在するのみでなく、我々はより早くもより遅くも、逆流も横脇道に行くこともできた。時間は存在し、我々が時を通して動くかのように。肉体の時、五感は一瞬しか知覚できない。瞬間が合成されて線形時間となる。脳と肉体を超えたのち、我々は覚醒でもって、時間と空間全体を横断できる。われわれは純粋意識であり、肉体の五感を持っていない。臨死体験中私は私の兄が私に会うために飛行機に乗っているのに気付く、私の病院の外やホールでしている医師達の会話に気付いた。時間と空間と個体はいつもある訳ではない。私がアクセスしたい時間のどの点にも私は焦点を当てることができた。過去世というのはパラレルかあるいは同時に存在するものへのアクセスである。全てに時間は同時に存在しているからである。我々は皆結合しているので、他人のリアリティを覗き見ることが、我々の現在を通してもれだし、あたかも記憶であるかのように我々の意識に入ることができる。」(78)

「私に直接かかわるすべてのものが同時に分かった。過去・現在・未来のどの時点も、同時に分かった。我々の肉体の知覚が、線形時間を生成する。今の時間しか肉体の五感を知覚できない。それが積み重なって線形時間となる。」(79)

「過去と現在と未来のすべての瞬間は、同時に起こる。従ってカルマは存在しない。」(80)

「至高意識は物質と時間の外にある次元にある。私の意識は時間と空間の制約を去った。」

(81)

㊦ 万物と一体になる宇宙意識

脳と肉体の制約を超えると、自己意識のエッセンスは時間と空間のバリアから解放され、星々や銀河を通過して宇宙空間全体に拡張し、宇宙全体に遍在し、万物を包んで万物と一体になり、宇宙意識となる。宇宙意識には過去と現在と未来という時間のバリアはなく、過去も未来もすべて現在となる。宇宙意識は万物と一体なので、時間と空間を含めて、一切の分離とバリアというものはない。宇宙意識ではすべてのものが切り離してバラバラにできない仕方で、一つの全体として一体になって共存し、コヒーレンス状態であり、非局在になっているので、すべては一つになっている。(whole in one 全1性) 私は万物であり、万物は私である。肉体の時には肉体が私の体であるが、宇宙意識になると、万物が私の体になる。すべてのものが同時に一つにつながっている。すべてのものを一つに結び合わせているのが、光の無条件の慈愛に他ならない。宇宙意識は物質の万物を見捨てることなく、無条件の慈しみを持って万物を包み、一つに結び合わせる光の完全な全体意識にある。臨死体験の自己意識のエッセンスは、すべての人間の自己意識のエッセンスと一つになるだけではなく、すべてのものと一体になる。宇宙意識には時間と空間のバリアがないので、主体と客体のバリアがない。宇宙意識は物質界を超えているので、物質は何ら妨害にならず、壁や建物などを超えて透視し、またそれらを素通りする。宇宙意識は万物と一体なので、宇宙全体を体験し知覚し、宇宙全体についての全情報を持っている。(全知) また宇宙意識になった臨死体験者の自己意識のエッセンスは、欲すれば宇宙のどこでもいかなる時点でも体験できる。(いかなる空間移動もないのでこれは瞬間移動ではない。) 典型的な例を引用しよう。

㊦ 空間の制約から解放された自己のエッセンスが宇宙空間に拡張するという例

「突然私はこの命の流れに乗って、地球から飛び立った。太陽系を過ぎ去り、超光速で銀河の中心を飛んだ。より多くの知識を吸収しながら。宇宙のすべては多様な命を生み出している。多くの世界を私は見た。我々はこの宇宙の中で孤独ではない。我々はこの宇宙の中心を通過して、意識の流れに乗った時、この流れはエネルギーのフラクタル波状に拡張した。超銀河団を通過した。流れが拡張するにつれて、私の意識は宇宙の万物を含むまでに拡張した。万物が私を通り過ぎて行った。」(82)

「集中治療室の状況からより大きな力によって、私は引き離される。私の意識はすべての空間を満たすまでに、私と万物との間の分離がなくなるまでに拡大し続ける。」(83)

自分の肉体に戻る時の例

「戻る時私は銀河や天の川や星々を通過して地球に戻った。私は星々よりも大きかった。私は宇宙の力と知識をすべて備えていた。地球が砂粒のように小さく見えた。私は物質宇宙

よりも大きかった。すべてを知っていた。」(84)

著名な心理学者C. ユングは、1944年に臨死体験をした。「私は宇宙の高みに上っていると思っていた。はるか下には、青い光の輝く中に地球の浮かんでいるのが見え、そこには紺碧の海と諸大陸とが見えていた。却下はるかかなたにはセイロンがあり、はるか前方はインド半島であった。私の視野の中に地球全体は入らなかったが、地球の球形はくっきりと浮かび、その輪郭は素晴らしい青い光に照らし出されて、銀色の光に輝いていた。地球の大部分は着色されており、ところどころいぶし銀のような濃い緑の斑点を付けていた。左方のはるかかなたには大きな広野があった。そこは赤黄色のアラビア砂漠で、銀色の大地が赤みがかかった金色を帯びているかのようだった。そして紅海が続き、さらいはるか後方に、ちょうど地図の左上方に当たる所に、地中海をほんの少し認めることができた。雪に覆われたヒマラヤを見たが、そこは霧が深く、雲がかかっていた。左手の方は全く見渡すことができなかった。自分は地球から遠ざかっているのだということを、私は自覚していた。どれほどの高度に達すると、このように展望できるのか、後になってわかった。それは驚いたことに、ほぼ1500kmの高さである。この高度から見た地球の眺めは、私が今までに見た光景の中で、最も美しいものであった。」(85) このユングの地球の描写が正確なことは、後に人工衛星に乗った宇宙飛行士が撮った写真によって確認された。

② 宇宙全体を包むまでに拡大し、万物と一体になるという例

「私の意識はすべての空間へと拡大し、私と万物の間に分離がなくなった。私は万物を包むだけではなく、万物になった。私の病院の外の医者達と家族の会話を聞いた。夫の驚いた顔と恐れを感じた。まるで私は夫になったかのように。兄のアヌープがインドから、私を見舞うために飛行機に乗ってくるのが分かった。私の意識は、周りの物質の世界を超え、時間と空間の制約を超えて拡張した。物質界の生では経験したことのない自由と解放感を味わった。癌の肉体からの解放感を味わった。地上のものへの執着は消え、無条件の愛に包まれた。私は悪夢から目覚めたように感じた。私の意識は身体と物質界を超えて拡張した。時間と空間を超えて、別の世界にまで拡張すると同時に万物を包み込んだ。今まで経験したことのない慈しみと命に満たされた。私の病室の外での医者達と家族の会話を聞くことができた。それまで経験したことのない完全な純粋な無条件の慈愛に満たされた。その慈しみは無条件で裁きはなく、差別もない。その慈しみを受けるために、何かをしたり、資格を得たりする必要はない。」(86)

「時間と空間の制約はもはやないかのように、私の意識はより大いなる意識と一つになるまでに拡大した。今までに味わったことのない自由を感じた。喜びと幸いを感じた。拡大するにつれ、万物と万人になった。この上ない無条件の愛が私を包み込んだ。物理的にどこか別の所に言った感じではなく、悪夢から目覚めたような感じ。私の魂は私の肉体とこの物質界を超えて拡大していた。それは個の存在のみではなく、時間と空間を超えた他の領域へと拡大すると同時にそれを包み込んだ。」(87) ここでは物理的に空間を別の場所に移動したのではなく、夢から覚めたように、時間と空間の制約のない存在の在り方(状態)

にシフトしたと言われている。また時間と空間を超えた自己意識の存在の在り方に拡大すると同時に物質界の万物を包み込んだと言われている。物質界を超えると同時に万物を包み込むのは、光の無条件の慈愛に他ならない。

「私は宇宙のエネルギー全体と一つになったので、私の覚醒以外は何もなかった。私はすべてを包含した。全てが分かった。(全知) 私はすべてのものになった。私はすべてのものの中に存在した。私と宇宙は一つであり、これが私の癌をいやした。私から分離した外のものはない。外ものは分離と二元性を示唆する。個の覚醒と生きることは、力強さと愛と励ましを持って、物質界で相互作用し続けるようにした。宇宙のエネルギー(気・プラナー)は、裁かず差別せずグルでもウミウシでも同じである。宇宙のエネルギーは純粹意識と同様に限りなく形がなく、我々と一つになり、いやしと奇跡を起こす。すべての人はこの宇宙エネルギーと結合していて、全てに人は宇宙エネルギーと一つである。我々は皆宇宙エネルギーの流れである。我々は皆この宇宙のエネルギーなので、この宇宙エネルギーにアクセスするために何かをする必要はない。」(88)

「私の拡大した覚醒の外に源はなかった。私は源になった。私は全体を包含した。私はすべてになった。私は万物の中の存在し、万物は私の内に存在した。私は永遠かつ無限になった。慈しみにおいて我々は一つ。我々は統合から分離し全体にもどる。神は私から分離した存在ではない。神は存在の状態である。二元論ではない。私は内部から永久に結合され、神から私は分離することは出来ない。私の身体はこの全体の一つのアスペクトである。」(89) ここでは本源である全体と私は一つになったこと、また人間の身体もその全体のアスペクトの一つであると言われている。

「私は宇宙全体とその中の万物と結ばれている。地上の身体を通して私がなしたすべての思い、感情、行動は全体に影響した。一体性の世界では全宇宙は私の拡大のように感じた。我々は皆この世界と我々の生の共同創造者である。」(90)

「大いなる黄金の光の臨在に近づくと、私の覚醒は広大に拡張し、宇宙全体に遍在し、私は過去と未来のすべてに気付いた。」(91) 「体外離脱して宇宙の万物と私の意識は一つになった。万物は私の体であり、万物は一体であることが分かった。」(92)

「私はホームに帰る。私は誕生以来求めていた万物と結合する。私は万物の1部になる。」(93) ここでは万物と一体になることがホームであると言われている。

「海でおぼれた時、意識が拡張し、宇宙全体を包むと、宇宙意識になり、完全な知覚と全知識を獲得した。そこにはすべてのものを包む慈愛があり、万物は一体であった。私は全体的な完全な意識になった。」(94) ここでは宇宙意識は万物と一体になるので、宇宙についての完全な知覚と全知識を備えていると言われている。

「私が水の下に沈んだとき、私の意識は水と一つになった。水は私の体になった。我々は皆深いレベルでは結合している。」(95)

「拡大した真の私は、万物を包含する。すべての人間、動物、植物、昆虫、山、海、無生

物、宇宙を包含する。我々はすべてのもの結合する。宇宙全体は生きていて意識を吹き込まれ、命で満たされている。」(96) ここでは脳と肉体の制約を超えて宇宙意識になり、宇宙の万物が自分の体になると、万物に命と意識が満たされていることが分かると言われている。(汎心・生命論)

「これまで見た中で、一番美しい生き生きとした緑の草、小道の付いた起伏のある丘、鳥が飛ぶ青空は見事な色をしていた。木・花・草・鳥には意識があり、私とコミュニケーションし、私自身を体験した。」(97) ここでも万物に意識があり、万物とコミュニケーションできると言われている。(汎心論)

「私は脳と肉体から解放され、宇宙のすべてのもと同時につながっていた。私は万物と一体であり、私は万物であり、万物は私であった。時間と空間の隔たりは一切なく、思いを向けるだけで、すべてのものをつなげた。」(98) ここでは意識がすべての世界では、意図するだけですべてのものをつなげることができると言われている。

「私は万物であり、万物は私である。」(99)

「臨死体験をし、脳と肉体を超えた意識にシフトした時、私は万物と一体であった。」(100)

「心停止し、血圧がゼロになった時、我々は皆岩も石も一つであることが分かった。」(101)

「私は宇宙の万物と結合していて、決して切り離されていなかった。」(102)

「臨死体験をした時、万物は一体であるということが分かった。」(103)

「万物は一体であり、分離もバリアもなかった。」(104)

「私が接したすべてのものに効果を及ぼした。全体性の入り組んだパターンの中で、すべてのものと結合していた。」(105)

「私の意識は宇宙全体を包むまでに無限に拡張し、別のリアリティのレベルに入った。」(106)

臨死体験者の自己意識のエッセンスが万物と一体になる宇宙意識になれば、意識がすべての世界なので、意図するだけで時間と空間のバリアを超えて宇宙のどこにでも、又いかなる時点にも即座にアクセスできるのは当然である。(空間の移動はないので瞬間移動ではない。) 1例だけ挙げよう。ここでは宇宙意識は真の自己と呼ばれている。「私は真の自己になったかのように感じた。いかなる制約もなかった。私は欲するところに行くことができ、望むことを知ることができた。自由を感じた。時間はもはや存在していなかった。」(107) 自己意識のエッセンスが脳と肉体から解放されると、万物のエッセンスと光の無条件の慈愛によって一つにされるということは、物質が万物のエッセンスが一つになることを妨げているということである。物質界は時間と空間の制約を伴い、コヒーレンスがデコヒーレンスになっている。

③私は万物と1体になり、主体と客体のバリアはなくなるという例

「それは純粹意識がただ存在しているという状態である。一つであるという状態が二元性

を越えさせ、全体を包み込んでいる自分とつながることを可能とした。それは心が物質を乗り越えたというのではない。プラス思考といった思考状態ではない。心の持ち方をはるかに超えることである。」(108)

「ホーム・天国・歓喜・幸福感。私の精神と心と魂が同時に完全な宇宙意識に対して開いた。その瞬間私は知るべきことをすべて知った。(全知) 私は全世界と一つであり、世界は私と一つだった。私たちの人間性は、死と呼ばれる経験の中で、魂が再会する。息をのむような一体感を概念化することは出来ない。この世からあの世への移行は、私にとって全身全霊を包み込む宇宙的な一体性の爆発によって、精神を一新させる経験だった。この霊的な変換の最中、細かいところまで完璧な宇宙全体の計画が秩序正しく展開するのを感じた。永遠の核心を垣間見て、死などというものは存在しないことをはっきりと知った。生命は愛と同じように永遠なのだ。」(109)

「光のすべてを包むエネルギーと一体になると、私は宇宙全体に遍在した。内界も外界もない。万物と私は一つであり、私は光の完全な意識として存在そのものであった。」(110)

「私には体はなく、宇宙と一つになった。我々は互いに全体の部分である。」(111)

「リアリティを描くことでは、意識は根本的な役割をしている。意識なしにはリアリティを説明できない。意識は存在するすべての基礎である。私は存在するすべてのものと全面的に結合していたので、私と私が通過移動した世界間のリアルな違いはなかった。」(112)

㊦ 光の完全な全1意識としての宇宙意識

脳と肉体を超える自己意識のエッセンスは、宇宙意識になるが多数の自己意識が存在するので、すべての自己意識のエッセンスを統合した光の全1意識が宇宙意識に他ならない。

「光の意識には無数の魂が接続している。」(113)

「過去と現在と未来の宇宙全体が一つのセンターに収斂していて、そのセンターは万物を照らしている光の純粹意識である。」(114)

「光は私の意識をすべて吸収した。光は私の中にもいた意識のセンターそのものから放射しているように見えた。光は全宇宙のすべての方向に照り輝いていた。光はすべての生きているものの部分であり、すべての生きているものは、光の部分であることが分かった。」(115) ここでは宇宙の意識センターは光であり、その光は生命の源であると言われている。

「この時間のない完全さの中で、この光と結びついていて、ある確かな存在を感じる。それは人ではなくある種の存在、その姿を見ることは出来ないが、その意識と自分の心が今結びついてるように思える。」(116)

「光の存在達は全体意識である。」(117)

「光は私の全存在を満たし、妙なるエクスタシーの表現できない高さへと私を高め、私はすべてに浸透している宇宙意識と完全に一体となった。」(118)

「宇宙には意識のセンターがあり、その宇宙の意志は太陽のように輝いている光であり、このセンターから個々の小さな意識のセンターが由来し帰還している。」(119)

「渦巻く巨大な太陽の様な光の球体があった。それは愛に満ち、私のことをすべて知っていた。この時私は超意識になった。光の意識は私と融合した。この光の存在はすべての人間の意識である。この光の意識は常にとともにあり、決して離れることはない。光の意識は私の内部深くにある。“私は大いなる私である。”という声を聞いた。知性を備えた光の存在は意識を備えた存在のすべてのセンターであり、この光なしには、我々は意識を持つことはない。すべての人はそのコアにおいて一つである。”私は大いなる私である。”ということは、意識の大いなる中心点では、私は他のすべて意識の1部であることを意味している。」(120) ここでは光の完全な全1意識がすべての意識のセンターであり、我々のすべての意識が統合され全体として一体になる光の完全な全1意識があり、肉体が死ぬと我々の意識はすべてこの光の全体意識に統合されると言われている。また我々の意識はすべてこの光の全1意識から由来しているのです。そこに還ると言われている。意識の起源は脳ではなく、光の全1意識にある。

㊦ 無条件の慈愛の絆による万物の結合。

万物を結び合わせて一つにするのは、全1意識の光の慈愛である。(愛の絆) 好例を挙げよう。

「愛は生命の根底、宇宙全体を関連付ける力である。」(121)

「それはかつて経験のしたことのない愛である。私はすべてのものと一つになり、全てを見、すべてを知った。」(122)

「重荷をおろして、重さなしになり、私は天使と同じように輝くまでに、私は純粋な愛で満された。純粋な愛が私から放射し、至福で満たされた。私はすべてを知った。すべての思考・言葉・行動・すべての目的・どのようになぜ万物が作られたのか、どのようになぜ万物は相互に結合しているのかが分かった。私は万物であり万人である。(過去・現在・未来において) その後私は分離して私の存在へと戻った。」(123)

「私は愛であり、理解であり、思いやりであった。私の現存が部屋を満たした。今や私は私の現存を病院のすべての部屋に感じた。病院の最も小さい空間さえも、私の現存で満たされていた。私は病院を超えて自分を感じた。町を超え地球を包んだ。私は宇宙へと溶け込んだ。私は1度に至る所にいた。至る所に脈動する光を見た。そのような愛する現存が私を包んだ。」(124)

「私は私の存在から愛の力を感じるのみでなく、光の世界のすべての存在から感じた。多くのレベルの多くの存在はすべて、至高の愛の同じ力場によって結合されていた。これは宇宙の基礎的な実体であった。」(125) ここでは多くの振動するエネルギー場は愛によって結合されていると言われている。

「どこにあっても、またいかなる時間にあっても、すべてのものは一つであり、すべてのものは全体の1部であって、何一つ分離しているものはなく、宇宙全体と一つにまとめているのが愛である。」(126)

「光の世界では無条件の愛によって、私は一つの全体に結合されていた。私は全体の1部であった。」(127)

「私はすべてのものと一つになった。しかも私は依然として私であった。私の真の本姓は、愛によってすべてのものと一つであった。」(128)

「光の世界ではすべてのものが一体であり、すべてのものが同時に存在し、愛と自由と解放感があった。私はすべてのものであり、私はすべてのものを知り、私はすべてのものと一つであった。光の愛に満たされて。」(129)

「すべては単に結合しているのみではなく、一体であった。私は光と共に全体性を感じた。すべては私と共にあるという感覚を持った。すべてのものへの愛・寛容・思いやりを持った。」(130)

「宇宙のすべてのものが結合していた。私は万物と一つであり、分離していない。愛のみがあつて、恐れはなかった。」(131)

㊦ 他を愛することは、自分を愛すること

私は万物であり、万物は私であれば、他を愛することは、自分を愛することであり、他を傷つけることは自分を傷つけることである。典型的な例を見てみよう。

「我々は皆1体なので、自分を愛することと、他者を愛することは一つのことである。」(132)

「我々は皆一つなので、他者を傷つけることは、自分を傷つけることである。」(133)

「死んだ時、私が学んだ大切なことの一つは、我々は皆生きている宇宙の部分であるということ、自分自身を傷つけることなしに、他者や他の生き物を傷つけることができると思うのは、まったく間違いである。森や花や鳥を見ると、それは私であり、私の1部だと思う。我々はすべてのものと結ばれているので、すべてのものを愛するならば、我々は幸いである。」(134)

㊧ 不可分の全1意識：M.Kafatos と C. ユング説

宇宙の本質である量子システムでは、すべてのものが切り離すことができない仕方で全1状態になって共存し、コヒーレンスであり、非局在である。ボース・アインシュタイン凝縮や生命体や自己意識には、デコヒーレントな物質界の制約のもとであるが、量子現象が見られる。M.Kafatos と R.Nadeau が指摘しているように、ボース・アインシュタイン凝縮や生命体や自己意識を創出する存在論的基礎として、不可分の全1性を備えた普遍的な意識の存在を示唆している。(135) 自己意識を分割することも対象化することもできない

ように、不可分の全1意識も分割することも対象化することもできない。知覚することもできない。視覚することは対象化することであり、不可分の全1意識は、知覚そのものを生み出す源だからである。それは主体と客体というバリアを超えていて、対象なき純粹覚醒そのものである。我々の自己のエッセンスの真のアイデンティティは不可分の全1意識であり、光の統合的全1意識のメンバーとなった時に、真の完全な自己になることが分かる。この不可分の全1意識こそが万物の源である。それは自分の思考でもって万物を創造した。万物は不可分の全1意識の思念形態である。(136) 不可分の全1意識の振動するエネルギー場が万物を構成している。(137)不可分の全1意識は、物質界の外、時空の外、肉体意識の外の存在している(超越)と同時に、物質界と肉体意識を包含している。(内在) 不可分の全1意識はすべてのものを分離できない仕方ですべてとして一体にしているので、肉体意識も宇宙の物質界も包含し、一つに結合している。(138) 宇宙の本質は外界と内界のバリアはなく、宇宙全体として分離できない仕方ですべてとして一つになっている。内界と外界は不可分な全1意識界が投影している両面である。この万物一体という宇宙の本質は、不可分の全1意識に他ならない。(139) M.Kafatos と R.Nadeau は、宇宙の本質が量子状態であるならば、万物との一体性は、量子システムと少なくとも相似的プログラムとして関連しているとし、万物一体性は脳の量子状態の統合された属性と全宇宙の量子システムとが連携している可能性があるとしている。(140)

不可分の全1意識は主体と客体の源なので、両者をバリアのない不可分の全体として統合している。この事は観測される対象と観測者と観測装置は本来分離できない仕方ですべてとして一つになっていることを意味する。自分と対象を分けることが、科学の観測と我々の身体の五感による知覚と認識機能の本質的制約である。(141) 不可分の全1意識は主体と客体のバリアを超えているので、身体の五感による対象としては知覚できない。不可分の全1意識は身体を五感を超えて、主体と客体のバリアを超えてはじめて認識し体験できる。マインドは不可分の全1意識の振動によって生じるので、マインドの源である不可分の全1意識を体験することができる。(142)

C. ユングの臨死体験についてすでに引用したが、ユング自身その体験を次のように説明している。「このような経験がありうるとは、想像すらできなかった。それは想像の産物ではない。幻像も、経験も、本当に現実であった。それについて主観的なものは何もない。それらはすべて、絶対的客観性をもっていた。我々は永遠という言葉を使うのにためらいを感じるが、私にとってこの経験は、現在、過去、未来が一つであるような、無時間状態の恍惚としか言いようがない。時間の中で生じた者がすべて、その状態では具体的な全体性へと集中してひとつに統合される。時間の中に区分されることもなければ、時間概念では測られ得るものもない。最も適切には、この経験を感情状態として定義されるかもしれないが、しかし決して想像されたものではない。私が昨日と、今日と、明日に同時に存在すると言ったことを、如何して想像できるだろう。あるものはまだ始まっておらず、他のあるものは確かに現前し、また他のあるものはすでに完了してしまっているという、し

かもこれらすべてがひとつでもあると言ったことを、思い描くことができるだろうか。感情の把握できる唯一のものこそ、統合的全体であり、虹色に輝く全体性である・・・人は言い表しえない全体の中に織り込まれ、しかもまったく客観的に、その全体を観察する。」
(143)

註

- 1) R.Nadeau & M.Kafatos, The Non-Local Universe, Oxford University Press, 1997
- 2) われに還る宇宙、日本教文社、1976, 22~32
- 3) Thomas & Brigitte Görnitz, Der Kreative Kosmos, Spektrum, 2002, 296~297
- 4) E.J.Winkler, Erleuchtung im Augenblick des Todes, Books on Demant GmbH, 2007, 5~6
- 5) E.R.Winkler, Erleuchtung, 19
- 6) H.P.Dürr, Auch die Wissenschaft spricht nur in Gleichnissen, Herder, 2004, 6~²63
- 7) H.P.Dürr, Gleichnissen, 134.36~37
- 8) Thomas & Brigitte Görnitz, Die Evolution des Geistigen, Vandenhoeck & Ruprecht, 2008, 183
- 9) Thomas & Brigitte Görnitz, Evolution, 106.240~266
- 10) H.P.Dürr, Von der Einheit der Natur, Das Friedensreich, Nr.5.2004
- 11) Thomas & Brigitte Görnitz, Kosmos, 302~304
- 12) T.&B.Görnitz, Evolution, 214; Thomas Görnitz, Quanten sind anders, Spektrum, 2006, 259.263.279.288
- 13) R.Lanza, Biocentrism, BenBella Books, 2009
- 14) J.K.Arnette, On the Mind/Body Problem: The Theory of Essence, JNDS, vol11, no1, 1992, 5~18
- 15) Thomas Görnitz, Quanten, 254~271; T.&B.Görnitz, Evolution, 240~266
- 16) 水滴と海のたとえは水滴が海に一体になると、水滴としての存在を完全に消滅してしまうので、正確なたとえとは言えない。
- 17) www.nderf.org/karen-vdk-ndess.htm
- 18) A.Moorjani, Dying To Be Me, Haty House, 2012
- 19) www.nderf.org/when-time-stood-still.htm
- 20) www.nderf.org/mike-i-jr.nde.htm
- 21) www.nderf.org/wayne-h's-nde.htm
- 22) www.near-death.com/experiences/sawyer4.html
- 23) 片桐すみ子編訳、輪廻体験、人文書院、1991, 77
- 24) www.nderf.org/lisa's-nde.htm

- 25) [K.Ring,Lessons from The Light,Insight Books,1998,14](#)
- 26) [www.celestialtravelers.org/NearDeathEzperience/marckJ.html](#)
- 27) [E.Durham,IStandAllAmazed,Granite,1998,38](#)
- 28) [www.nderf.org/Lisa's-nde.htm](#)
- 29) [Cap.DaleBlack,FlightToHeaven,BethanyHouse,2010,99](#)
- 30) A.Petro, Remembering The Light,Outskirts Press,,2011,5
- 31) [www.mindspring.com/~scottr/nde/markh.html](#)
- 32) [www.nderf.org/barbara-s's-nde.htm](#)
- 33) [www.nderf.org/andrew-p's-nde.htm](#)
- 34) [www.spiritualtravel.org/OBE/rpasarow.html](#)
- 35) [www.ndelight.org/index.php?option=com.content&view=article&id=116:Williams-nde&catid=25:the-project6Itemid=2](#)
- 36) [www.nderf.org/denice-b's-nde.htm](#)
- 37) [www.mindspring.com/~scottr/nde/rob.html](#)
- 38) [www.nderf.org/NDERF/NDEExperiences/gustave-ste.htm](#)
- 39) [www.nderf.org/NDERF/NDEExperiences/Jeffery-o-nde.htm](#)
- 40) [www.nderf.org/jesse-n's-nde.htm](#)
- 41) S.S.Farr,WhatTomSawyerLearnedFromDying,HampthoroadsPublishingCompany,1993,39
- 42) M.Morse,CloserToTheLight,VillardBooks,1990,116
- 43) K.Ring&E.E.Valarino,LessonsFromTheLight,InsightBooks,1998,189
- 44) K.Ring,Lessons,46
- 45) [www.nderf.org/steve-b's-nde.htm](#)
- 46) [www.nderf.org/filiesha-l-probable-nde.htm](#)
- 47) [www.nderf.org/james-w-nde.htm](#)
- 48) [www.near-death.com/goines.html](#)
- 49) 「闇と影のない光の世界」の項を見よ。
- 50) [www.nderf.org/wayne-h's-nde.htm](#)
- 51) [www.nderf.org/judie-n's-nde.htm](#)
- 52) [www.nderf.org/NDERF/NDEExperiences/sarah-w-probable-nde.htm](#)
- 53) [www.nderf.org/Burke's-NDE.htm](#)
- 54) 吉福伸逸編、意識の臨界点、雲母書店、1991,77
- 55) [www.near-death.com/star.html](#)
- 56) 「完全情報・完全意識・完全知覚・完全理解」の項を見よ。
- 57) 鈴木秀子、死に行く者からの言葉、文芸春秋、1992,12
- 58) K.Ring,HeadingTowardOmega,Quill,1984,12

- 59) B.Harris, Full Circle, Pocket Books,1980,210
- 60) K.Ring,Lessons,46
- 61) J.Antonette,Whispers of The Soul,Quicksilver Production,1998,32
- 62) Three times into the light,Vital Signs,vol21 no2,18
- 63) C.Zeleski,Otherword Journeys, Oxford University Press,1987,125
- 64) www.nderf.org/Catherina-G7s-NDE.htm
- 65) 吉福伸逸編、臨界点、77
- 66) N.L.Danison,Backwards,APLee & Co.,2007,224
- 67) www.nderf.org/lindas-probable-nde-2903.htm
- 68) www.nderf.org/lisa's-nde.htm
- 69) www.aleroy.com/board171.htm
- 70) J.Antonette, Whispers,26
- 71) www.angelacademy.com/maxnews/articles/vol5.lifeafter.html
- 72) P.M.H.Atwater,Children of the New Millenium, Three Rivers Press,1999,133
- 73) Backwards,42~43
- 74) この点については「臨死体験における非局在性について」と「時間と空間の分離を超える意識」の項を参照。
- 75) 「時間と空間の分離を超える意識」「臨死体験における非局在性について」の項を見よ。
- 76) www.iands.org/nde-archieves/nde-accounts/everything-self-evident.html
- 77) P.M.H.アトウォーター、光の彼方に、ソニーマガジズ、1995,112~114
- 78) A.Moorjani,Dying 142~143
- 79) A.Moorjani,Dying,171
- 80) A.Moorjani,Dying,171
- 81) www.nderf.org/mathilde-m's-nde.htm
- 82) Mellen-Thomas Benedict,Through the light and beyond,inL.W.Bailey & J.Yates(eds.) The Near-Death Experience,Routledge,1996.44
- 83) A.ムアジャーニ、喜びから人生を生きる！ナチュラルスピリット、2003,102
- 84) www.nderf.org/filiesha-l-probable-nde.htm
- 85) ヤッフエ編、ユング自伝 2、みすず書房、1990,124~125
- 86) A.Moorjani,Dying,65~66
- 87) A.ムアジャーニ、喜びから人生を生きる！105
- 88) A.Moorjani,Dying,145~146
- 89) A.Moorjani,Dying,167
- 90) A.Moorjani,Dying,141
- 91) www.nderf.org/NDERF/NDE Experiences/yazmine-s-nde.htm
- 92) www.nderf.org/mathilde-n's-nde.htm

- 93) www.nderf.org/augustin's-nde.htm
- 94) www.nderf.org/Lana's-nde.htm
- 95) www.nderf.org/marta-g-nde.htm
- 96) A.Moorjani,Dying,70
- 97) www.NHNE.Near-Death Experience Network.org/My NDE-Reunited with the lion people.htm
- 98) 飯田史彦、ツインソウル、PHP 研究所、2007,64~67
- 99) J.Antonette,Wispers,31
- 100) www.nderf.org/charlie-d-nde.htm
- 101) www.nderf.org/mary-m-nde.htm
- 102) Y.Perry,More Than Meets the Eye,2004,0
- 103) P.M.H.アトウォーター、光の彼方へ、234~235
- 104) L.Zimmerman,www.near-death.com/forum/0067.html
- 105) P.M.H.Atwater, Coming Back to Life, Transpersonal Publishing,1998,36
- 106) www.nderf.org/mathilde-m's-nde.htm
- 107) www.nderf.org/lisa's-nde.htm
- 108) A.ムアジャーニ、喜びから、206~207
- 109) D.ブリンクリー、光の秘密、ナチュラルスピリット、2013,24~25
- 110) J.Price, The Other Side of Death,Fawcett Cohimbine,1996,62~63
- 111) www.nderf.org/sue-v's-nde-like-ste.htm
- 112) E.Alexander,Proof of Heaven,Piatkus,2012,154~155
- 113) www.dharma-talks.com
- 114) www.nderf.org/when-times-stand-still-nde.htm
- 115) K.Ring,Omega,65
- 116) K.リング、臨死体験、吉福伸逸編、意識の臨界点、77
- 117) D.Goble,Through The Tunnel,S.O.U.L.Foundation,1993,65
- 118) R.Crookall, The Study and Practice of Astral Projection,The Citadel Press,1960,3~4
- 119) www.nderf.org/india/physician's.htm
- 120) www.oberf.org/Christopher's Experience-obe.htm
- 121) Magdalena Bleus,Nahtoderfahrung
- 122) www.nderf.org/kathy-w-nde.htm
- 123) Jon Lesge(ed),Truly Alive,2010,14
- 124) J.Antonette. Whispers,27
- 125) R.Kruger, A Higher Good, PublishAmerica,2001,25
- 126) www.nderf.org/Jody's Corner.htm

- 127) www.nderf.org/cheryl-n-nde.htm
- 128) www.nderf.org/NDERF/NDE_Experiences/robyn-nde.htm
- 129) www.ndeweb.com/board170.htm
- 130) Ph.Berman, The Journey Home, Pocket Books, 1996, 36
- 131) www.near-death.com/nightingale.html
- 132) A.Moorjani, Dying, 172
- 133) A.Moorjani, Dying, 170
- 134) R.A.Moody, The Light Beyond, Bantam Books, 1988, 34
- 135) The Conscious Universe, Spring Verlag, 1990, 179~180
- 136) N.Danison, Backwards,
- 137) M. & T.Kafatos, Looking in Seeing Out, Versa Press. 1991, 235~242
- 138) Looking, 15~17
- 139) Looking, 260~264
- 140) The Non-Local Universe, Oxford University Press, 1999, 190
- 141) Looking, 1~8
- 142) Looking, 252~260
- 143) ヤッフ編、ユング自伝 2、133~134